

「労働者」世界紀行

—— E・ユンガー『コーカサスの手記』における「計画風景」——

川 野 正 嗣

序. 本論の目的

1932年に書かれた『労働者 (*Der Arbeiter*)』の中でユンガーは、第一次世界大戦の総力戦体制の展開に伴う、社会の合理化や画一化が世界規模で拡大していく様子を「作業場風景」(*Werkstättenlandschaft*)という言葉で表現した。

我々の時代を特徴づけ、一般的に産業風景と呼ばれることの多い作業場風景は、それ特有の建物と施設、それ特有の都市と区域によって、すでに実際のところ、極めて一様に地球を覆っている。道路と線路、有線と無線、空路と海路によって繋がれることのない地域は全く存在しない。(……) 今ようやくその最初の局面を終えつつあるこの変化が、このように点においても、破壊的な性格を持ち、自然風景と文化風景とを爆破して、そこに異物を混入させているということは全く疑う余地がない¹⁾。

このように、自然や文化の多様性を破壊して作られる、画一化された風景は、地球全体を覆う規模で拡大しているという。

そして、『労働者』執筆から10年後の1942年に、ユンガーはドイツとソ連邦との戦場であるロシア沿海地域に赴き、その地で「作業場風景」が地球規模に拡大していくという、自身の確信をさらに強めたのだった。1942年10月から翌年の1月まで、「世界の果て」において「存在の限界のくらし」²⁾を記録したこの紀行文は『コーカサスの手記 (*Kaukasische Aufzeichnungen*)』というタイトルで『光輝 (*Strahlungen*)』の一部として1949年に発表されたが、『労働者』における、技術の進歩や「作業場風景」の拡大についての淡々とした叙述とは異なり、この作品は技術時代の悲観的な調子を帯びている。

『コーカサスの手記』という作品は、『労働者』でユンガーが専心していた「計画風景」や「作業場風景」を目の当たりにした³⁾とみなされ、現実化された『労働者』世界の報告という点が協調されてきた⁴⁾。とはいえ、ユンガーは、コーカサス地方で目の当たりにした「労働者」世界に衝撃を受けただけではなく、またそのような「労働者」世界からの突破口をもこの作品の中で描いていた。それは、技術時代における個人の自由の可能性である。

本論では、まずユンガーの「労働者」の風景を概観した上で、『コーカサスの手記』における

「計画風景」(Planlandschaft)に着目し、その具体的な姿を明らかにしたい。なぜなら、「労働者の形態」が世界規模で拡大していく中では、無秩序な「作業場風景」が統制の取れた「計画風景」へと発展していくとユンガーは述べており、第一次世界大戦の「作業場風景」が第二次世界大戦の東部戦線では「計画風景」へと変化していることが示されているからである。そして最後に、ユンガーがコーカサスの苛烈な「計画風景」の中に見出した自由の思想を示したいと思う。

1. 「作業場風景」から「計画風景」へ

第一次世界大戦の総括として書かれた『労働者』は、「軍事行動へと誘う指南書」⁵⁾であると同時に、「パノラマ的な時代展望と将来の展開を描いた診断」の書⁶⁾でもあった。ユンガーによる時代診断によれば、第一次世界大戦の総力戦の戦場において、「労働者」という新人類が出現したが、そのモデルは第一次大戦の前線兵士であり、戦場での無数の犠牲者が、「労働者の形態」(Gestalt des Arbeiters)の完成という世界的規模の大事業に奉仕する者として称揚されている。

現在の世界は、「労働者」が技術という手段によって、世界全体を「総動員」する状態にあり、あらゆるものが戦争に向けて用立てられている状態だという。その結果、戦争という目的のために、社会は画一化、規格化されていき、そこでは「生がエネルギーへと転換」され、人間は機械の部品のように全体に奉仕することを余儀なくされる。このような過程は「作業場風景」という様相を呈する。そこで人々は、これがまだ何の為の作業なのか分からないまま、ひたすら単調な労働に従事する。その段階ではまだ「個人的社会的アナルヒーの印象」⁷⁾を拭い去ることはできないが、その次の段階の「計画風景」(Planlandschaft)において人々は明確な計画に基づいて労働に従事することになる。「計画風景が単なる作業場風景と区別される点は、それが明確に設定された目標を有するという点にある」⁸⁾。ここには最早個人の自由が介在する余地は無くなってしまう。

純粋な作業場風景にとって代わる計画風景においては、もはや個人や個人的自由概念の図式に基づく勢力がその担い手として現れることがなく、類型形成がそれまでよりもいっそう明瞭に浮かび上がる⁹⁾。

そして、目標を設定し、「計画風景」を実現するための大前提となるのが、「建築主としての役割」を果たす「国家」という存在である。しかしそれは、単なる国民国家ではなく、「国家の造形能力の最も確かな象徴に属する、大規模な造船能力を持つ国や、技術的手段の主人及び達人として地球上で最強の戦闘力を具現する一万人の要員をいつでも用意できる国」といった、強力な支配力と工業力をもつ国家に他ならない。そのため、「諸々の計画風景を整序し、自らに従属させる仕事」は「帝國的な地位をもつ国家計画」¹⁰⁾によってのみ、実現することが可能である。ユンガーによれば、この「計画風景」のひろがる国家こそがソビエト連邦だという。

ユンガーは F. A. Kramer の『赤い帝国 (Das Rote Imperium)』についての書評の中で、ソ連邦を「労働者」時代の一大観光地だと述べる。まずユンガーは、19 世紀の旅行者について、彼らは自然や文化を求めて旅行する「教養旅行者」(Bildungsreisende)¹¹⁾であり、その例として、南米に赴いたシャトーブリアンや、ブルクハルト、ゲーテらを挙げる。そして、このような教養人たちは、「常時増え続ける教養旅行者の群れを、目に見えぬ軌道へと動かすガイド役となる」¹²⁾という。その対極にある 20 世紀の旅行者こそが「展示旅行者」(Ausstellungsreisende)であり、「展示旅行者」の数は「教養旅行者」の数を圧倒しているという。この新しいタイプの旅行者の目的は「新しい帝国の成長を見ること」、すなわち、「数字、エネルギー、創造的潜在力のエキシビション——つまり我々の時代が独自の電力を支配し、掌握している方法、つまりその独自の電力に可視的な表現が与えられているというその方法」¹³⁾を見ることなのである。つまりその目的は、「労働者」国家があらゆるものを戦争へと駆り立てていく有様を見ることである。そして「実際、ロシアこそが我々の時代の偉大な旅行先なのだ」という。なぜなら、「ロシアへの旅行というのは、展示者、すなわち見るべき箇所を国家が決定する展示旅行だからである」¹⁴⁾。そこに見出される「決定的な重要性は、その計画が経済的、技術的、或いは文化的な措置でなく、政治的な措置であるという点である」。その結果「観察者のイメージの中でこの国は唯一の強力な作業場へと変じ、その巨大な国家計画の遂行と願望以外は自身の目に入らぬようになるのだ」¹⁵⁾。このように、「国家」が高度な政治的能力を駆使して強権的支配を実施することによって、国内の諸々のエネルギーを動員し、完全に統制された「計画風景」を実現させること、これが「労働者」国家の姿であり、こうした「国家」による「計画風景」のガイドツアーこそが「労働者」時代の旅行スタイルだという。こうしてユンガーはソ連の強力な政治力を評価する一方で、ソ連では「総動員」が実施されているということを否定する。「同地で実施されている動員の試みは、根本的に全体的なものではなく、せいぜい特殊で部分的な動員にすぎないだろう。その本来の意義は将来的に示されるはずである」¹⁶⁾。ソ連にしろ、ドイツにしろ、「真の意味での総動員」を遂行できるかどうかは、如何に人間と技術が一体となれるかどうかにかかっていた。この書評が書かれた 1933 年時点では、ソ連は反ベルサイユ体制の国として¹⁷⁾、肯定的に描かれていたが、また、「労働者」の台頭という点で、ソ連とドイツはユンガーの中で特筆すべき二大国家であった。では、この 10 年後の 1942 年、戦争という目的の為にエネルギーを「総動員」する二大「労働者」大国が激突する独ソ戦の戦場を目の当たりにして、ユンガーはどのような印象をうけたのだろうか。

2. 「計画風景」としての東部戦線

ユンガーは「現状調査」(Bestandaufnahme)¹⁸⁾という名目で東部戦線の視察を命ぜられ、パリを離れることになった。1942 年 11 月 12 日付の日記の中で、ソ連への視察旅行についての不安があらわになっている。「これまでにないほどに、どのような経過を辿るかが想像もつかず、ま

たどれだけの成果があるかについても想像もできないような旅行に踏み出すのであり、私はまるで、冬の日に濁った水の中に網を投げ入れる漁師のようである」¹⁹⁾。そして11月20日に Lötzen を発ち、翌21日にキエフに降り立った。翌日の日記に、機上から見たウクライナの印象を書き記している。「樹木少なく、一方で枝分かれした、深くくぼみのある峡谷ばかりである。その光景は、優良な土壌が途方もない深みにまで達しており、僅かにその表面の薄片のみが収獲されている、というイメージを呼び起こす」²⁰⁾。ユンガーは、ロシアの自然のもつ潜在力に感銘を受けた一方で、Rostow の街中を散策した際にはそれと対照的な感想を述べている。「街中を散策。脱魔術化の様相が繰り返されている。リオにおいては、ラス・パルマスや多くの海辺において私の歩みは巧みに構成されたメロディーにも似ていたが、ここでは不調和が侮辱的に私の心情に入り込んできた」²¹⁾。こうしてソ連の都市は、ヴェーバーの「脱魔術化」という用語でもって表現される。ユンガーによる都市風景の観察と研究は移動中も続けられるが、それはユンガーを落胆させるものだった。

更に景観の研究、相変わらず脱魔術化されたオリエントの印象。目は考えられる最も不愉快な光景に慣れねばならなかった。オアシスも休憩地点もない。ただ技術的なものだけが整然としているだけだ。——つまり、鉄道、自動車、航空機、拡声器、そして当然ながら武器の世界に属する全てのモノが。反対にあらゆる有機的なものが不足している。栄養、衣服、温かさ、明かり。この不足がなお一層のこと顕著なのが、より高次の段階の生活、遊び、幸福、そして快活さ、そして恵のある、豊かな、芸術的な力である。そしてこのようなことが地球上でもっとも豊かな土地のひとつにおいて生じているのだ²²⁾。

ユンガーは、「労働者」世界をバベルの塔の崩壊後の世界にも比せられると述べ、人間の技術的所業を罵倒し続ける。ユンガーの嘆きは、都市風景だけに留まらない。この町に暮らす人々にも鋭い観察の目が向けられる。「その光景が呼び起こすのは、抑圧され、重荷を背負った存在の印象だ。彼らの動きは素早く、落ち着きなく、とはいえ然したる目的もなく、まるでかき乱された蟻塚のようである」²³⁾。このように「労働者」の世界では人間の活動が昆虫にも似た様相を呈しているとユンガーは述べる。そして、12月2日、ドイツとソ連のぶつかる前線に近づくにつれ、「皮剥ぎ小屋の空気が頻繁に感じられるので、あらゆる仕事への意欲、イメージや思考の形成への意欲が絶えるほどだ」²⁴⁾と述べ、「計画風景」への嫌悪をあらわにしている。更にユンガーは、1942年12月20日、Nawaginskij にて、最前線を視察する中で、第二次世界大戦の特異性を以下のように分析する。

私たちは今、全く巨大な人骨の山のひとつにいる。それはセバストポールや日露戦争以来に人々が知ることになったものである。技術、自動機械の世界が大地の力とその苦痛の能力に出会ったに違いない、それによってそのようなものが生じるのだ。ヴェルダン、ソンム、フ

ランダースはこれに対して逸話的である。(……) 思想史的に第二次世界大戦は第一次世界大戦とは大きく異なる。今次対戦はおそらく、ペルシア戦争以来、意志の自由をめぐる最大の対決である²⁵⁾。

このように東部戦線では、第一次世界大戦の激戦が逸話的 (episodisch) に語られるほどに、自動機械が猛威を振るっており、これは歴史上において意志の自由を巡る最大の対決だとされる。というのも、ここにいる「人間は巨大な機械の中で、ただ受動的に参加しているという感覚を抱く」²⁶⁾ ほどに機械技術の機構に組み込まれているからだけでなく、また特筆すべきことは、「技術が如何に深く道徳的なものに侵入しているのかということである。人間は、そこから逃れることのできない、大きな機械の中にいると感じている。そこではいたるところで恐怖が支配している。灯火管制、グロテスクな防諜、全能な不信などだ。二人の人間が会おうところでは、互いに疑念を抱きあう。——それは挨拶の時点ではじまる」²⁷⁾。こうした技術に伴う恐怖が支配する場合は「絶対的な零点への接近」²⁸⁾ あるいは「恐ろしい渦」²⁹⁾ というモチーフで示されている。このように機械の支配するニヒリズムの状態は道徳レベルで人間の在り方を変化させる。ユンガーの報告から分かることは、実際の「労働者」世界が、『労働者』で描かれた力強い労働エネルギーの集約と表現ではなく、人間の道徳が技術によって浸食され、破壊されることで人間性が失われる恐怖の支配する場でしかなかったことだ。現地の司令官から、残酷な毒ガス戦の有様を聞いたユンガーは以下のように述べる。「私とその光栄を大変好んでいた軍服、肩章、オルデン、武器の前では吐き気を催すのだ。かつての騎士道は死んだ。戦争は技術者によって遂行される。人間は、ドストエフスキーが『ラスコリニコフ』で描いた状態に到達した。」³⁰⁾ それはまさしく「昆虫段階」である。「計画風景」の中の人々はこの巨大な機械の中で、主体性を失い昆虫と化す。「すでにバラバラになった人々が、まるで蟻のように瓦礫の間を放浪している」³¹⁾ という描写からも分かるように、この作品では人間が昆虫の比喩によって描かれている箇所が随所にみられる。

こうして、ドイツとソ連という二つの「労働者」勢力の激突する場において「最も鋭敏で高度な思考、権力の最も激しい衝撃が一つになる。そのような場で世界の計画が現れる。」³²⁾ その世界計画の風景とは『労働者』で示された「計画風景」に他ならない。ユンガーは東部戦線の「計画風景」が「労働者の形態」の完成、即ち技術の完成へと向かっていることを確信する。とはいえ、そのような場でユンガーは1932年のように宿命論的な「英雄的リアリズム」を唱えることはしない。

「計画風景」が否定的に描かれる一方で、肯定的に称えられるのが、コーカサスの山や森のような「自然風景」である。エルブルズ山の威容を目にしたユンガーは「長きにわたり幾度も、手仕事として、神の御業としての大地がその姿において、私に語りかける」³³⁾ と、述べており、さらにコーカサスの山上から眼下の森林地帯をながめてこう語っている。「私はこのような大規模な恐ろしさの中に未だ偉大な源泉があるということを感じた。それはトルストイが強く感じたのと同じものである。」³⁴⁾

3. 「計画風景」の中の「自由」

人間が昆虫化し、技術が道徳に侵入する「計画風景」の中でも、ユンガーは人間が主体的に自由に生きる術はあるという。ユンガーは、ソ連兵への尋問を担当する将校との対話において、以下のように考える。「技術的な抽象概念の残酷な裂傷は、個々人の最内奥にまで、その豊かな土壌にまで侵入するのだろうか。ありのままに、人々の声色や相貌が与える印象を鑑みるならば、私はそれを否定したい」³⁵⁾。ここから見て取れることは、諦念ではなく、希望であり、技術によって浸食されない、人間の内面というものが存在するという。更に、「人がそれによつては容易に降伏せぬようなものを世界が提供しているということを知らねばならぬ」³⁶⁾と述べているように、世界が提供するものによつて人間が機械地獄を乗り越える可能性が暗示されている。こうした可能性は、東部戦線の機械地獄と対比的に描かれる、ロシアの自然と人々の素朴な暮らしの描写の中に示唆されている。

例えば、1942年11月25日、ユンガーは、Woroschilowskの文化的な風景を描写しているが、「私が通り抜けたいくつかの通りはこれまで私が見たものよりも好ましい印象を与えた。とりわけツァーの時代の家々は、いまなお幾分かの温かみを発しているが、その一方で忌々しいソヴィエト式の箱物が国土を席卷している」³⁷⁾として、脱魔術化されたRostowの街並みの描写とは好対照をなしている。この後、ビザンティン様式の教会にある塔に登ったユンガーは、眼下の街を見下ろして、「概して古い建築物がやはり野卑な輝きを発している。にもかかわらずそれらは、新しい構造物の抽象的なつまらなさよりも好ましい印象を与える」³⁸⁾と述べている。こうして、機械技術に侵されていない時代の建物を評価し、それらにはまだ温かみや好ましい野卑な趣があるという。また、12月6日には、森の中で遭遇した農耕用のロシア馬について「この光景はかつての時代を、かつての豊かさを思わせる。これを見るにつけ、この土地が抽象化作用によって剥奪されたものを感じるとともに、もしもこの地が、好ましい、慈父の如き力の太陽の下においてならば、如何に栄えることだろうかと感じる」³⁹⁾と述べ、技術時代以前のロシアを讃えている。また、「森の周囲の製材所を見た時、食いつくし、貪り食うという機械の性格がはっきりと理解せられた。それはF・G・ユンガーが『技術の幻想』の中で語っていたことであつた」⁴⁰⁾。これなどは森という自然風景と機械世界を対比的に描いた、機械技術の搾取的な性格が顕著に表れている象徴的な描写である。

このように、「計画風景」の拡大によって破壊されてしまった、ロシアの牧歌的風景の残滓に対するユンガーの哀惜の念をこめた叙述は、随所に見られるが、ユンガーは単にそれを無念がるだけではない。ユンガーは「計画風景」や総力戦によつて失われてしまったものに思いを馳せる一方で、「終わりのなき出口はまた、考えられる限りで最悪なものでもある。終わりのなき継続の広く広がった予測は本質的に幻想の欠如に由来する。この予測は、出口の見えない人々にありがちなものだ。」⁴¹⁾として悲観的な見通しを否定し、戦争の法則を免れることのできる領域に眼を向ける。12月11日、遊撃戦を指揮する将校との対話の中で、パルチザンについて以下のように述

べる。

パルチザンは、しかし戦争法の外部に存する。もっともそんなものがまだありうるとすればの話だが。パルチザンは狼の群れの様に森の中で包囲され、殲滅される。私はここで動物学にも切り込んでいく話を耳にした⁴²⁾。

ここではパルチザンというものが戦争の法則の外部にある存在とみなされている。如何に統制された戦争といえども、そこにはある種の空白地帯が現れるという。

戦争はみんなが無駄なく分けることのできるケーキではない。そこには常に共通の部分が存する。これこそが、争いを遠ざけ、戦闘から全き獣性と悪魔的暴力を遠ざける神の取り分である⁴³⁾。

このような領域が具体的にどのように実現されるのか、という点については「赤十字」の例を出すにとどまっているが、パルチザンの暗躍する領域もこのような戦争の真空地帯だという。

ユンガーは1943年1月1日に、「計画風景」を生きていくにあたっての、三つの前提を提示する。それはまず第一に、わきまえた暮らしをすること、第二に不幸なものへ配慮すること、そして最後に、破局の渦の中での個人の救済のため熟考することである。それは人間が尊厳を保つために必要なことである。しかしその為に安易な方法をとってはならないという。何故なら、「我々は、隠された全体のわずかに表面の一部を確保しているにすぎず、我々の案出する程度の脱げ道は、我々を殺しかねない」⁴⁴⁾からだ。個人の救済、個人の自由の確保のためには慎重な態度が必要だとされる。それはまず大地の擁する強大な力を自覚することからはじまると言う。

ユンガーは「市民的自由」や「労働者の自由」とは異なる、新しい自由の獲得が必須であることを説く。

自由は、他の多くの者が思っているように、19世紀の意味においては再現されえない。自由は、歴史的事象の、新しい冷徹な高みへと至らねばならない。混沌の中から聳え立つ尖塔の上の鷲のように、更なる高みへ昇らねばならぬ。また自由は痛みを通り抜けねばならぬ。自由は再び獲得されねばならない⁴⁵⁾。

技術が進歩し、「脱魔術化」されてしまった「労働者」の時代に、19世紀の意味での「市民的自由」は最早不可能である。そして「労働者」時代にその機構に積極的に飛び込んでいく「英雄的リアリズム」という「労働者」の「自由」も、ユンガーがコーカサスで目の当たりにしたように、残酷で無機質な機械地獄を招来するだけであった。ユンガーは新しい自由の必要性を確信するが、それがどのようなものであり、どのようにしてそれを獲得することができるかについては

明言しないが、技術の時代に個人の自由を獲得するためには、鷲のように高みに昇っていく必要があるというのだ⁴⁶⁾。

そして自由に至るために世界が提供するヒントは、「手つかずの大地の力」⁴⁷⁾や「原初力」⁴⁸⁾を擁する自然の中、とりわけ森にこそあるのだという。ユンガーはコーカサスの風土について以下のように述べている。

コーカサスは、民族、言語、人種の、古くからの本拠であるだけではない。その中には、まるで匣の中のように、ヨーロッパとアジアの広大な領域における動物、植物、風景が憩うのである。山々は記憶を思い起こさせる。大地の意味がまるで、鉱石や貴重鉱物が露になっていたり、水の流れがここでその水源から溢れるように、より身近に現れている⁴⁹⁾。

しかし、至る所に豊かな鉱脈があるとはいえ、そのような自然の力は、我々に全貌を晒すことはない。「頭頂部の黒いとさが際立つ、コーカサス種のカケスは森に生息する。やはり、私が再び感じるのは、時代精神が如何にあらゆる美しいものを消し去ろうとしているかということである。私たちは、格子を通して、監獄の窓を通してのようになら、これを知覚できないのだ」⁵⁰⁾。こうして自然の豊かさを知覚することは極めて困難であるとはいえ、遙かな高みから鋭い鷲のような観察眼を駆使して、まずは世界が提供する手掛かりを捉えることが必要だという。

まとめ

以上見てきたように、『コーカサスの手記』は単なる『労働者』世界の実地検分によるルポルタージュという性格をもつだけでなく、また「計画風景」における「新しい自由」に関する考察など、『労働者』の思想を乗り越えるような視点が見られた。

ここには、ユンガーの技術に対する信仰にも似た期待感は影を潜め、むしろ技術に対する不信感を見ることができる。『コーカサスの手記』は、ユンガーの技術観の変化を捉える上でも極めて重要な作品であると言えるし、その後の『森を行く』というエッセイにもつながる、「個人の自由」というテーマの萌芽も見られる。

注

- 1) ERNST JÜNGER, *Der Arbeiter*, in: Ernst Jünger. Sämtliche Werke, Band 8, Stuttgart 1979. S. 226ff.
- 2) ERNST JÜNGER, *Kaukasische Aufzeichnungen*, in: Ernst Jünger. Sämtliche Werke, Band 2, Stuttgart 1979. S. 450.
- 3) Kiesel, Helmuth: Ernst Jünger. 2007 München. S. 511.
- 4) Martus, Steffen: Ernst Jünger. Stuttgart, Weimar 2001. S. 158.
- 5) Loose, Gerhard: Ernst Jünger. Gestalt und Werk. Frankfurt a. M. 1957. S. 95.

- 6) Martus, Steffen: Ernst Jünger. Stuttgart, Weimar 2001. S. 90.
- 7) ERNST JÜNGER, *Der Arbeiter*, in: Ernst Jünger. Sämtliche Werke, Band 8, Stuttgart 1979. S. 229.
- 8) a.a.O., S. 289.
- 9) a.a.O., S. 247.
- 10) a.a.O., S. 295.
- 11) Weber, Jan Robert: *Ästhetik der Entschleunigung*, 2011 Berlin. S. 652.
- 12) a.a.O., S. 652.
- 13) a.a.O., S. 653.
- 14) a.a.O., S. 654.
- 15) a.a.O., S. 654.
- 16) a.a.O., S. 657.
- 17) a.a.O., S. 658.
- 18) ERNST JÜNGER, *Kaukasische Aufzeichnungen*, in: Ernst Jünger. Sämtliche Werke, Band 2, Stuttgart 1979. S. 442. 「現状調査」という名目でコーカサスに赴いたユンガーだったが、東部戦線には、無抵抗者への暴力や残酷な報復措置など、「タブーである箇所があまりに多過ぎ」るために現状調査は不可能だろうという見解を述べている。
- 19) a.a.O., S. 413.
- 20) a.a.O., S. 419.
- 21) a.a.O., S. 419.
- 22) a.a.O., S. 421.
- 23) a.a.O., S. 421.
- 24) a.a.O., S. 431.
- 25) a.a.O., S. 458.
- 26) a.a.O., S. 459.
- 27) a.a.O., S. 472.
- 28) a.a.O., S. 479.
- 29) a.a.O., S. 481.
- 30) a.a.O., S. 470. シュヴィルクによればユンガーが Woroschilowsk において、A 軍集団司令官のエヴァルト・フォン・クライスト元帥からコーカサス戦線における惨状を聞いており、この箇所は、親衛隊保安部らが「最終的解決」の為に毒ガスで人々を虫けら（Ungeziefer）のように虐殺しているという話に幻滅したことに起因して書かれたという。（Schwilk, Heimo: Ernst Jünger. Ein Jahrhundertleben, 2014 Stuttgart. S. 404.）
- 31) a.a.O., S. 467; S. 455.
- 32) a.a.O., S. 476.
- 33) a.a.O., S. 435.
- 34) a.a.O., S. 476.
- 35) a.a.O., S. 439.
- 36) a.a.O., S. 478.
- 37) a.a.O., S. 423.
- 38) a.a.O., S. 423.
- 39) a.a.O., S. 433.
- 40) a.a.O., S. 466.

- 41) a.a.O., S. 469.
- 42) a.a.O., S. 441.
- 43) a.a.O., S. 441.
- 44) a.a.O., S. 471ff.
- 45) a.a.O., S. 436.
- 46) これに関連した部分で、「ちょうどその近辺に何発かの砲弾がさく裂した。それによって大鷲が追い立てられて、この渦の上をゆっくりと旋回しながら昇っていった。」(a.a.O., S. 453.) という「渦」の上を自由の象徴である鷲が悠々と飛んでいる箇所も、ユンガーの新しい自由のイメージを示す象徴的な描写である。
- 47) a.a.O., S. 477.
- 48) a.a.O., S. 444.
- 49) a.a.O., S. 448.
- 50) a.a.O., S. 449.

参考文献一覧

- Kiesel, Helmuth: Ernst Jünger. Die Biographie. Berlin 2007.
- Loose, Gerhard: Ernst Jünger. Gestalt und Werk. Frankfurt a. M. 1957.
- Martus, Steffen: Ernst Jünger. Stuttgart, Weimar 2001.
- Morat, Daniel: Von der Tat zur Gelassenheit. Konservatives Denken bei Martin Heidegger, Ernst Jünger und Friedrich Georg Jünger 1920–1960. Göttingen 2007.
- Penke, Niels: Ernst Jünger und der Norden. Eine Inszenierungsgeschichte. Heidelberg 2012.
- Schöning, Matthias / Stöckmann, Ingo (Hg.): Ernst Jünger und die Bundesrepublik. Ästhetik – Politik – Zeitgeschichte. Berlin 2012.
- Schwillk, Heimo: Ernst Jünger. Ein Jahrhundertleben. Stuttgart 2007.
- Sommer, Hartmut: Revolte und Waldgang. Darmstadt 2011.
- Weber, Jan Robert: Ästhetik der Entschleunigung, 2011 Berlin.